

結 語

扱、上來述べ來つた如き變遷の間に新作されて上演された義太夫淨瑠璃には、果して如何なる價值を認むべきであるか、これに就き概括的に一言して置き度いと思ふ。ところで、約一世紀間に亘つて新作された義太夫淨瑠璃の總數は、著者の知る限りでは無慮六百篇にも及ぶやうである。その中には翻案改作愚作惡作も少からずあるが、之を要するに、先づ元祿・享保の作品を標準としていふと、第一に音樂としては、元祿時代といふ新時代に新たに勃興した町人階級に對する新音樂として完成されたものと見るべきであると考へる。その意味は、公卿階級の舞樂や武士階級の能樂の如く、前時代よりの遺産を有難く守つてゐるのではなくして、此時代より以前に行はれた音曲のあらゆるものの精髓を取つたのみでなく、又その時代に流行した流行謠や俗謠等をも隨時隨所に取り入れて、之を資材として、作曲の天分を十分に發揮して新時代の要求に應ずる、即ち新らしく起つた階級の人々の心琴に觸れる獨自の新音樂を完成したものである。尙少し具體的にいへば、初代義太夫が始めて藝界に打つて出た頃、上方で樂壇に雄飛

して居た流派中で、金平風の豪快悲壯激越なる語り口の井上播磨掾の曲風を本體として、これに典雅哀婉なる宇治加賀掾の特長を加味し、更に角太夫・文彌其他の長を採つたのみでなく、古くは平曲・謠曲・幸若舞曲を始めとして、室町の末期から當代に至る迄の小唄・俗謠・流行歌・民謠・踊歌・歌舞伎歌・物貰歌・大道藝等に至る迄のあらゆるものを取つて、之を藥籠中の物とした上に、自己の樂曲大成の爲に自由に驅使したものであつて、この點に於て義太夫節はその時代迄の音曲の集大成されたものといへる。實に、舊きを捨てないと共に新らしき囚はれない自然の聲をも取つて、これに新生命を與へて新時代に適する眞の國民樂を大成したのであつた。これがその樂曲に國民性に根ざすものある所以であると信ずる。而してこの態度は、模擬を斥けて創造につとめねばならぬ將來の我が國作曲家に對して、或る暗示を與へるものではあるまいかと考へる次第である。

次に之を文學として見るに、その内容上に於ては、國民的の傳説・史譚・信仰談・巷説等の集大成された眞の國民文學であつて、その時代の精神生活や風俗習慣が如實に寫し出されて居る。又形式上から見れば、散文と韻文と脚本との中間に立つやうなもので、抒情の分子を含んだ叙事的劇詩としての最も複雑な様式を示すものである。従つてこれを眞に味はふには、非情

の人形を生かす爲に、曲節に乗せられる爲の詞章である事を條件として、鑑賞し批判せねばならぬ事はいふまでもない。

最後に、この義太夫淨瑠璃が江戸時代の一般社會に及ぼした精神的影響について考へるに、並木五瓶は、

近松の淨瑠璃本百冊讀む時は習はずして三教の道に悟り、上一人より下萬民に至るまで人情をつらぬき、乾坤の間のあらゆる事森羅萬象辨へざる事なし。(戯財録)

と言つて居る。即ち近松の作百篇を讀めば、神道・佛教・儒教この三教の奥義を窺ひ、宇宙のすべてを識る事が出来る。即ち淨瑠璃本は修養書であり、又萬有の知識を包含する一大百科辭典であり、又人生の真相を映し出してゐる明鏡でもあるといふ意味であつて、これは大近松の作品に對する讃辭であるが、程度の差こそあれ、この意味の言葉を以て淨瑠璃の民衆教化の效力を言ひ表し得ると信じる。江戸時代の民衆は道學先生の堅苦しい教に接する事は出来なかつたし、またお布施本位の坊主の説教に感激する者でもなかつた。寺子屋で往來物位を習つただけの者は勿論、論語を讀んでも論語は知らなかつた者が多かつたと思はれる。さういふ彼等に對して忠孝を教へ、道義の念を勵まし、男の意義を鼓吹し、貞女の鑑を示し、献身犠牲の如何

に尊いかに感動せしめ、人情の有難さをしみじみと味はせ、且又人生の姿を會得する事を得させたものは、實に樂しみつつ教へられ諭された淨瑠璃その物乃至は歌舞伎であつたのである。著者一個の記憶を辿つても、幼少の頃父や祖母から話されたり、又は田舎芝居で見た雄々しい悲壯な淨瑠璃中の人物の活動や芝居人物の面影が、今尙深く心のカメラに焼きつけられてゐて、どうしても拭ひ去る事が出來ない。『忠臣藏』の中のあの「男でござる」といふ天川屋義平や、夫の爲に身を賣るおかるや、我がいとし子を身代りに立てる『寺子屋』の松王夫婦の如きは、いつ思ひ出しても涙ぐましい程に思はれる人物である。我等の祖先がかういふ人物によつてどれだけ感化を受けた事であらう。

之を要するに、義太夫淨瑠璃は、永久に變らない人情の眞を寫し、永く國民の精神を培ふべき國民性の眞髓を傳へて居る祖先の立派な精神的遺産といふべく、従つて、少くとも、近松の戯曲を始めとする淨瑠璃の諸名作を、更に新らしい眞面目な態度を以て鑑賞検討しなければならず、また切にそれを希望する次第である。